

初年次教育における自校教育

——上級生主体の「自校学習プログラム」——

川久保剛・江島顕一（麗澤大学）

はじめに——本報告の目的

本発表は、麗澤大学外国語学部の初年次教育における自校教育の取り組みについて報告するものである。

本学は、初年次教育の一つの展開として、自校教育に関する授業を行っている。しかしながら入学して間もない初年次生は、自校に対する学習意欲や学習動機が希薄である。そこで本学部では、初年次生全員を対象に「自校学習プログラム」と称する取り組みを行っている。その特色は、上級生が企画・運営を担当していること、そして新入生オリエンテーションキャンプの一部として展開していることにある。これにより新入生は、自校学習に対する意欲と動機を高めることができる。今回は、このプログラムについて報告を行いたい。

報告にあたり、麗澤大学外国語学部における初年次教育と自校教育の現状について触れておく。

（1）初年次教育の現状

・「基礎ゼミナール A・B」(通年／必修科目)。同科目の教育目標は、主として大学への適応とスタディ・スキルズの習得に置かれている。

・「新入生オリエンテーションキャンプ」同キャンプの目的は、①麗澤大学の建学の理念を学ぶ、②麗澤大学で共に学び、生活することの意味を考える、③学生同士および教員との交流、親睦を深める、④参加者一人一人の特性や気持ちを出来るだけ知るようお互いに務める、の四点に置かれている。

（2）自校教育の現状

・「道徳科学 A・B」(1年次／通年／必修科目)。同科目は、①自校史の学習、②建学理念の学問的基盤である「道徳科学」の学習、③倫理・道徳の学習を教育内容としている。

・「麗澤スタディーズ」(2・3・4年次／半期／選択科目)。同科目は、自校史の研究を内容としている。

・「麗澤スピリットとキャリア」(1・2・3・4年次／半期／全学共通科目／選択科目)。同科目は、①自校教育、②キャリア教育を内容としている。

・「自校学習プログラム」。上記「新入生オリエンテーションキャンプ」の一部として、主として①の目的に基づいて実施されている。

1. 「自校学習プログラム」の概要

本学の「自校学習プログラム」の概要と性格について記しておきたい。

まず、「自校学習プログラム」は、入学直後の時期に実施されている「新入生オリエンテーションキャンプ」(以下、オリキャン)の一部として行われている。「オリキャン」は、専攻ごとに、大学セミナーハウスや大学キャンパスの施設を会場におよそ2泊3日で実施されている。

「オリキャン」は、外国語学部の「オリエンテーション委員会」の所管のもと運営される。そして「自校学習プログラム」の運営は、教員2名が所管し、その2名は、「道徳科学教育センター」(自校教育と道徳教育に関する附属機関)のセンター員を兼務している。もともと、「自校学習プログラム」の企画・

運営は、上級生（約10名）によって担われる。なお、担当学生は、学内での公募と教員の推薦によって選抜される。

その内容は、先述したように上級生が考案するが、例えば本年度は、①建学の理念と現代社会のかかわり、②創立者の人となり、③本学の特色ある取り組み、④各専攻や課外活動の紹介、⑤会場施設と展示物の説明、などを学生の視点で、学生の経験を盛り込みながら発表、案内する形で行なわれる。

なお、「自校学習プログラム」の取り組みは、2007年度（平成19年度）から行われ、本年度で6回目を迎えた（その変遷については、「道徳科学教育センター」のHPにて報告がなされている）。

2. 「自校学習プログラム」の目的と特色

以上のような、本学における「自校学習プログラム」の特色とねらいについて記しておきたい。

（1）目的

「自校学習プログラム」は第一に、先に示した正規課程での自校教育関連科目に対する意欲・動機の向上を目的としている。第二に、これに付随する形で、上記授業への導入効果の意味合いも持たせることを目指している。

（2）特色

「自校学習プログラム」の最大の特色と考えている点は、上級生が企画・運営を担当しているということである。さらにこうした学習を通じての上級生と初年次生との交流は、ピア・サポート的な教育機能や、ロール・モデルの提供機会を果たすことともなっている。

また、自校学習を授業開始前の新生生オリエンテーションの一部として実施するという、授業外で取り組んでいるところ、大学の歩みや創立者の事績などに直接触れられる施設や場所を活用して行っているところなどが挙げられる。

（3）副次的効果

「自校学習プログラム」を通じて、自校教育の内容領域における学生の興味関心を把握し、それを関連科目の教育目標や内容に反映させていくことができる。換言すれば、学生の視点を授業に取り込むことができるいわゆる「学生参加型FD」の効果が一定程度期待できる。

また上級生にとっては、自校教育分野における「PBL（Problem Based Learning）」の機会ともなっている。

それから、「自校学習プログラム」を担当した学生が、終了後に、本学での学校行事や部活動などに積極的に参画し、また自校教育関連科目を主体的に履修するといった効果もみられる。

おわりに——成果と今後の課題

簡易的なアンケート調査から、一定の成果を確認することができた。しかし今後は、詳細なアンケート調査を実施し、より正確に成果を確認する作業が求められる。また、「自校学習プログラム」の全学的な実施や、正規課程の自校教育関連科目との有機的連関化も今後の課題となろう。さらに、担当上級生の負担（就活、卒論などに間接的な影響）の解消も重要課題といえよう。

（参考文献）

- ・「自校教育の到達点と今後の課題」（『大学教育研究フォーラム』第14号、立教大学、2009年）
- ・「事例（麗澤大学）・自校教育や卒業生の言葉で誇りと自信を与える」（『Between』2011年12月・2012年1月号、ベネッセコーポレーション）
- ・川久保剛「新生生のための「自校学習プログラム」——今年で6回目——」（『麗澤大学ニュース』第96号、2012年7月）